

# 夏期講習だより

## 第2号

文責 飯田 勇介（七久保小学校）

5月21日（火） 第1回 夏期講習事前読み合わせ会報告 P80～P88. L2

第1回読み合わせ 令和5年5月21日（火）

読み合わせ範囲：「西田哲学選集」第一巻 「西田幾多郎による西田哲学入門」 第二部 善の研究

「第一編 純粹経験」（第一章） 「第二編 實在」（第一章から第五章）

司会者： 延藤 浩毅 先生（伊那東小学校）

レポーター： 熊谷 拓真 先生（高遠小学校）

### ○レポーター発表 熊谷 拓真先生

#### ① 子どもは純粹経験の連続ではないか。

P80. L1に「経験するというのは事実そのままに知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粹というの、普通に経験といっているものもその実は何らかの思想を交えているから、毫も思慮分別を加えない、真に経験そのままの状態をいうのである。」やP82. L11に「例えば一生懸命に断崖を攀ずる場合の如き、音楽家が熟練した曲を奏する時の如く」から夢中や没頭を日々繰り返す子どもたちは純粹経験をしているのではないか。

#### ② 自分の過去と純粹経験について

幼少期に何度も読み耽った読書や学生時代に夢中になったハンドボールなどの経験は純粹経験と言えるのではないか。また、教員になり音楽会で一生懸命に指揮棒を振って子どもと心が一つになった体験や夢中で叩いた太鼓の経験も同様に純粹経験と言えるだろう。

一方で、日常でつい触ってしまうスマートフォンでのSNSの使用は純粹経験とは言えないだろう。

#### ③ 学校での具体的な子どもたちの姿と純粹経験

子どもたちが休み時間に読書や体育館で夢中に遊ぶ姿は純粹経験であろう。一方で、授業中に関係のないものを触ったり、ボーっとしたりする姿は純粹経験ではない。なぜ、関係のないものを触ったりボーっとしたり子どもたちの経験が純粹経験にならない原因は、教師の関わりや教材にあるのではないか。大縄跳びなどの子どもの興味関心のあることではクラスが夢中になって取り組んでいる。

#### ④ まとめ

純粹経験とは夢中や没頭できる経験ではないか。子どもたち一人ひとりが夢中になり、没頭して取り組める姿を目指して、教員人生を歩んでいきたい。そのためには、それぞれの児童の実態把握を徹底していきたい。

今回のレポート発表は子どもたちの思いや、自分の人生を見つめ直す機会になった。

### ○グループ討議のまとめ

#### Aグループ

純粹経験とは「先入観が全くなく直感のみ。経験そのものを受け入れる。」ということではないか。思慮や分別のない赤ちゃんは純粹経験の連続である。スマートフォンを通して純粹経験ができるのではないか。

唐澤先生より

「自分が感じたことをそのままに言おう。自分の琴線に触れたことを言おう。」とのアドバイス

## B グループ

総合学習がしっくりきた。スタートは純粹経験ではないか。様々な活動や学習をしていく中で知識や経験を得て、さらに活動や学習を進めていく中で必要な知覚などを取捨選択し、必要ないものを削ぎ落とし、純粹経験に戻るのではないか。達人の域。

純粹経験だけが良いというのではなく、思慮分別が入る経験を経て成長して、純粹に戻る。

## C グループ

純粹経験とは夢中な状態。「大人は純粹経験をしているのか」という問い。小さな子どもは感覚や感性が大きいのので純粹経験がたくさん。知覚や分別が身に付いた大人はどうだろうか。大人は思慮分別を多く身に付けているが純粹経験をしているのである。ただ、それを認識できないだけだ。

## D グループ

「子どもの純粹経験は、知覚できないのではないか。純粹経験は学校のどこにあるのだろうか。」

教員は生徒指導で、経験を踏まえて指導する際には純粹経験ではない。規律やルールを意識しているが、純粹経験が何かを考えることで「子どもの成長とは何か」という教育の本質的な部分も同時に考えることができた。

## ○唐澤正吉先生のまとめ

- ・「経験とは事実そのままに知るの意である」。善の研究もその後の論文も全てがここに集結する。
- ・私が何を経験するというのは、西洋の哲学である。
- ・経験（世界、場）が能動的に私を感じさせてくれる。主客未分の状態から思慮分別を交えて経験をし、達人になる。例えば、運転。初めは意識するが熟練していくうちに無意識な状態となる。純粹経験は私の経験の根本にある。西田が名付けた。
- ・統一と不統一。自分が意識した時は不統一。感じた時は純粹経験ではない。すなわち意識的でない意識。要するに赤子のような状態。大人も純粹経験の根本。経験は全て純粹経験。視点が自分ではなく、物事が自分に作用するということ、視点は経験（世界、場）言葉を失い。再構築していく。純粹経験を感じた瞬間にその経験は純粹経験ではない。
- ・統一と不統一を繰り返して、成長していく、どんどん動いていく。そういう世界である。
- ・自分が経験する。自己は自分ではない。自分と他者との経験。自己も経験も自分が考える自己や経験ではない。
  - ・考えを持つのは不統一である。「自分がうまくいかない」「評価を使用とする」その瞬間に純粹経験ではない。
- ・激務の中で哲学研修に来るピンチの中で成長する。言葉に表すことのできない経験は純粹経験。

## ○感想

レポーターという立場で参加した2年目の第一回読み合わせ会だった。レポート発表やグループ討議を通して自分の考えをもち、唐澤先生の講義を経て「純粹経験」への理解がさらに深まり、西田先生の哲学に少し近づいたように恐れながら感じた。

グループ討議の中である先生が「初めは言葉にならなかったけれど、討議をしていく中で純粹経験とは“ありのままを受け止めることではないか”と思う。」と語ってくれた。この先生は唐澤先生の言葉を借りれば「この討議の中で統一と不統一を繰り返して成長していくことを経験した」のではないか。

私が今回の講義の中で最も印象に残っているのは「経験（世界、場）が能動的に私を感じさせてくれる。」だ。西洋的な視点で生活している私たちはついつい自分を視点にしてしまうが、そうではなく世界という視点で私や物事を見るということだと感じた。言い換えれば、私が存在しているから世界が存在しているように錯覚しまいがちだが、世界が存在しているから私が存在しているということではないか。私のこの考えも正しいのかどうかかわからないが、今後の哲学研修で統一と不統一を繰り返し成長していきたい。